

〔巻頭言〕

新型インフルエンザを「正當にこわがる」

井 上 忠 恕

世界保健機関（WHO）は2009年6月12日、新型インフルエンザ（2009年4月にメキシコで確認された豚由来の新型インフルエンザA/H1N1）の警戒レベルをフェーズ5から最高のフェーズ6に引き上げ、いわゆるパンデミックという世界的流行への警戒を強く訴えました。WHO報道官は、新型インフルエンザによる世界の確認死者数が700人を突破したと明らかにしました（2009年7月21日現在）。日本国内の報告数では死者や重症者はいないが、感染者総数は4246人です（厚生労働省7月21日発表）。今一番懸念されているのは、冬場に入っている南半球の情勢と北半球での秋以降の第2波の襲来ではないかといわれています。

今回のインフルエンザの名称を初めの段階は多くのところで「豚インフルエンザ」と報道されてきました。この呼び方はウイルスが豚肉を介して感染するとの誤解を与え、各国の消費者の間に豚製品を敬遠する動きが広がったため、実際には「新型ウイルス」はヒトからヒトに感染する型に変異しており、現在の感染拡大で、豚はもはや無関係ということになります。

国際獣疫事務局（OIE）はメキシコや米国で最初の感染例が見つかった直後から、発生地にちな

んだ『北アメリカインフルエンザ』を提唱しました。4月29日から米政府は「農家の生活を守るため」として、「H1N1インフルエンザ」の呼称に切り替えていました。しかし、CDC（疾病対策センター）は“H1N1 Flu (Swine Flu) Novel influenza A (H1N1)”と表記していますし、イスラエルでは、豚はユダヤ教で不浄な動物とみなされているため、豚インフルエンザを「メキシコ・インフルエンザ」と呼ぶべきだと主張していました。

日本国内では厚生労働省が4月28日に「新型インフルエンザに係る対応について」で、今回のH1N1を「新型インフルエンザ等感染症」に位置づけたことによりそれから、行政機関を中心に「新型」と呼ぶようになっていきます。

一方、新聞社では厚生労働省の発表からほぼ1か月後の段階で「新型インフルエンザ」を次のように表記していました。

- 朝日新聞：新型の豚インフルエンザ
- 日本経済新聞：豚インフルエンザから変異した新型インフルエンザ
- 読売新聞：新型インフルエンザ（豚インフルエンザ）
- 毎日新聞：新型インフルエンザ
- 産経新聞：新型インフルエンザ
- 共同通信：新型インフルエンザ

テレビではNHKはじめ各局ともほぼ「新型インフルエンザ」で報道されています。

2001年のBSE発生の際、私自身は動物衛生研究所で広報にかかわっていましたが、「狂牛病」がBSEになるまでかなりの時間を要しました。今回は各方面のかなり早い対応で「新型インフルエンザ」が広く使われるようになりました。関係者として用語の使い方は十分に気を使うべきであることを示していることとして重要性を再認識しました。

2009年7月12日の英科学誌ネイチャー（電子版）に河岡義裕東京大学医科学研究所教授ら52名の共同チームは「インフルエンザに対する免疫を1918年以前に生まれた人は持っている可能性がある。」と明らかにしました。さらに河岡教授は「1918年のウイルスは人で流行するうちに大きく変異した。一方、新型ウイルスはほとんど変異しないまま豚で流行していたため、1920年代以降に生まれた人に免疫はないとみられる」と指摘しています。また「H1N1型は豚のウイルスが人に感染するようになり、ヒトへの適応が進む過程になるとみられ、この部分の変異を注意深く監視してゆく必要がある。」と述べています。

ほぼ1日以内に世界各地へ大量輸送できる航空

機の普及により、今般の新型インフルエンザの伝播のように短期間に世界中への広がりを加速しているとみられています。

西村秀一氏が、「史上最悪のインフルエンザ」(A. W. クロスビー著)の日本語版への序文で寺田寅彦（地球物理学者で随筆家。1878-1935年）の次の言葉を紹介しています。

“ものをこわがらな過ぎたり、こわがり過ぎたりするのはやさしいが、正当にこわがることはなかなかむづかしいことだと思われた。”

（寺田寅彦著：小爆発二件から）

寺田寅彦の1935（昭和10）年の浅間山の噴火時の随筆ですが、「正当にこわがる」ことは新型インフルエンザの対策にも当てはまると思われまじ。情報に過剰反応して無駄な動きをすることなく、迅速な情報交換と緊密な研究協力体制が必要です。新型インフルエンザのウイルスの全容も解明されはじめ、最も効果的と言われている早急なワクチンの開発、製造へ動き始めています。新型インフルエンザの拡大防止対策には初動の対応が必要であり、対策のためには一刻の猶予もおかない正確な情報の開示、情報交換の協力が必要であることを強く感じます。